

## 【第4分科会】④

春日直美 先生（千葉）

### 日本画材を活かした日本の美術・工芸に関する教育

#### ～日本画及び料紙制作を通して～

**Q 1** 教材費はいくらですか？（日本画、料紙）教材費の面での工夫していることはありますか？

**A** 日本画は昨年度は2,300円、内訳は雲肌麻紙、木製パネル、共用として岩絵の具、生花、膠など。料紙も2,300円、その大半が仕立て代で、1,700円で京都の専門業者に頼んでいます。（ネットで業者に複数あたり、一番良心的なところですよ。通常3,000円台が相場ですよ。）

本校は年間5,000円の教材費なので、日本画材に比較的多く割り当てられます。しかし岩絵の具はなるべく安い合成を中心に選び、金箔は「きり箔」には本金、たくさん使う「砂子」については、真鍮の箔を使用しています。きり箔を手作りするのは、既製品は高価なためです。（追記、本金でないと、2～3枚、熱（アイロン）により貼りあわせることができないのです。箔の厚みを作ってから、切り分ける作業をします。きり箔はやらなくても、「砂子」で十分華やかです。）筆も専門店が高価なので、カタログの筆を数年置きに買い換えて共用しています。「砂子筒」は、ホームセンターで購入できる金網を、クラフト芯材に巻き付けで手作りしました。細かめの網の筒は、画材屋で購入しました。

個人の材料は雲肌麻紙、木製パネルだけで、あとはひと講座人数分の用具を4講座で共用しています。モチーフの生花も、同様です。

**Q 2** 日本画は準備が多いが、どうしたら楽に扱えますか？  
岩絵の具は、生徒にどこまで扱わせていますか？

**A** 日本画絵の具は水で洗えるので、扱いや処理は楽です。カタログにある鳥の子紙（色紙などでも）と筆、墨汁、水干絵の具（チューブ入りのもので代用してもよいのでは）、膠、どうさ液をつくる「みょうばん」があればできます。用具は専用のもを最初から揃えるのではなく、代用できる範囲で。皿に残った絵の具は、そのまま乾かして「湯ぬき」は行いません。また使う際には授業の前にぬるま湯をかけてふやかして置きます。

胡粉の「百叩き」は、生徒にやらせるのも一興だと思います。しかし、やらなくても他の水干絵の具と同様に、乳鉢で擦った状態で瓶詰めして、生徒に溶かしています。特別上品な胡粉使いを目指すならともかく、このようなやり方でも剥落や発色は問題ありません。

岩絵の具の使用は他の絵の具にはない、日本画制作の醍醐味だと思います。あまり荒い粒子の絵の具は確かに扱いにくいので、せいぜい9番までで、11番以降のものを主に使っています。膠をしっかりとなじませ、筆への含み方や運び方を紹介したら、あとは任せて使わせれば、生徒なりにマチュールを作ります。

**Q 3** もう少し簡単に日本画を体験させる方法はありませんか？

**A** もし一から準備するなら、墨彩画のようなものから始めたいです。線描を主体にしたり、墨の濃淡を活かした身近なモチーフの写生などいかがでしょうか？単純なモチーフでも、余白や空間を活かした構図を考えさせる日本画の勉強の範囲に入ると思います。

**Q 4** モチーフは、なぜ花、決まった文様なのですか？

**A** 花は茎の表現により画面構成がしやすく、空間をとらえるのに好都合だと考えます。とりわけ菊は、丈夫で日持ちしますし、本校のような地道で細やかな作業を好む生徒には向いています。以前に大きな花びらの方が描きやすいかと百合の花で取り組ませたところ、塗り重ねる際に先にのせた岩絵の具を擦って剥がしてしまいがちになる生徒が多かったので、以降は菊（スプレーマム）に決めました。下図でしっかり花びらをデッサンできれば、塗るのは難しくありません。

かつて細やかな作業が苦手な生徒たちの学校では、「おもちゃかぼちゃ」や果物模型など、ゴロンとしたモチーフを用意しました。じゃがいもや玉ねぎでも、絵としておもしろくなりそうです。

背景に揉み紙技法を行うのは、余白に意識を向けさせ、実景ではない、装飾的な効果を体験させるためです。

**Q 5** 何年生の課題ですか？

**A** 2年生で行わせています。花や膠が日持ちする寒い時期の2学期後半から3学期にしています。

**Q 6** 制作後の鑑賞はどのように行っていますか？

**A** 最終授業の時間に、教室に作品を6～7人ずつ並べて感想など言わせてから、構図や色使いについて良さや特徴を指摘して講評しています。

**Q 7** 評価の観点をもう少しゆっくり見たいです。

**A**

「日本画」の評価の観点

	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
題材の評価規準	日本の美術や文化に関心を持ち、歴史的背景を踏まえた上で、日本画材や技法についてその特徴を理解し主体的に表現しようとしている。	対象の形や色の美しさを見出し、画面で再現するために創造的な表現の構想を練っている。	日本画特有の表現方法を理解し、自己の制作につなげようと表現方法を追求している。	古典を通して日本の美術の特徴を知り、他国との文化の繋がりを理解している。 自他の作品のよさや美しさを感じ取っている。
学習活動に即した評価規準	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の絵画史の概要を知り、理解しようとしている。</li> <li>対象の花をよく観察し、絵画表現の動機をつかもうとしている。</li> <li>日本画材の扱い方を理解しようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>対象を観察してデッサンを確実にやっている。</li> <li>モチーフを美しく見せる形体、画面構成を行っている。</li> <li>色彩について感性を生かして選択し、色の組み合わせを行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本画材の特徴をとらえ、それを生かした表現をしている。</li> <li>余白について装飾的、空間的にとらえ、独自の絵画世界を築こうとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>美術史と関連させて日本画の特色を感じ取っている。</li> <li>自他の表現を比較し、違うよさや美しさに関心を持ち、味わっている。</li> </ul>

「料紙」の評価の観点

	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
題材の評価規準	日本の美術や文化に関心を持ち、歴史的背景を踏まえた上で、日本画材や技法についてその特徴を理解し、主体的に構想を練って追求しようとしている。	扇子の形や和紙の美しさを見出し、配色を意識している。	料紙特有の表現方法を理解し、自己の制作につなげている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>古典を通して日本の美術の特徴を知り、他国との文化の繋がりを理解している。</li> <li>自他の作品のよさや美しさを感じ取っている。</li> </ul>
学習活動に即した評価規準	<ul style="list-style-type: none"> <li>扇子の歴史的概要や料紙制作の装飾技法を知り、理解しようとしている。</li> <li>材料や用具の扱い方を理解し、表現方法を工夫しようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>和紙の特徴をとらえ、それを活かした加工をしている。</li> <li>色彩について感性を活かして選択し、色の組み合わせを行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>数々の装飾技法を自己の感性に引き付けて表現している。</li> <li>材料の特性やそのよさを感じ取り、創意工夫をした作業を行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>歴史的な扇子や料紙技法の特色を文献や映像から理解している。</li> <li>自他の表現を比較し、違うよさや美しさに関心を持ち味わっている。</li> </ul>

Q 8 美術と工芸の範疇についてのお話をさらに知りたい。

A 教育の場においてのそれぞれの在り方とは、美術は学習指導要領で絵画、デザイン、彫塑、映像という幅広い分野を通して自己表現を求めているのに対して、工芸は社会性や誰にとっても使い勝手のよい作品制作という用途に目的を定めていて、指導には素材にバリエーションを求めているのではないのでしょうか。ひいては美術教育は主に作品が目的である一方、工芸教育はその制作過程をたどることに主眼を置き、素材に適った伝統技術の継承をすると捉えています。

生徒には、絵画や彫塑は「主語」が表現の始まり、すなわち「自分はこう考える、こう感じている」ということであるのに対して、デザイン、工芸の分野は客観的にある特定の人あるいは不特定多数の人のためになることを考えることから出発するものだと伝えています。

日本の美術を生徒に紹介する際に、特に江戸時代までのものについて、その性質を伝えるにはこの美術と工芸という枠を、どうしてもまたがってしまいます。明治になるまで、美術、工芸という言葉や概念そのものがなかった歴史の中、例えば襖、屏風、螺鈿漆器、扇子、着物など、あらゆる身の回りのインテリア、用具に絵や模様、文様を描きつける民族だったのですから、これをいちいち絵と本体を切り離して、生徒に向かって取り上げるとはおかしな話です。

美術では、デザインとしての側面がある日本の美術工芸を取り上げる一方、工芸授業でも陶芸の絵付けや染色他、様々な技法における装飾の場面で、日本画、墨絵のような絵画、伝統文様などについて、制作に及ばないまでも鑑賞で取り上げないのは、片手落ちではないでしょうか。「装飾性」は日本美術の大きな要素なので。

今回の「扇面制作」は、美術のデザイン、工芸の紙工芸として、両方授業課題として扱いました。美術においては、様々な料紙の組み合わせやスパッタリングの型絵表現に、工芸では料紙制作や紙継技法に力点を置いて指導、評価をしました。

他に具体的に、美術で工芸的な日本の美術をどう取り上げるかをここで考えてみます（本校は工芸があるので、現在担当している美術では工芸授業の課題と同じものは扱わないようにしていますが）。例えば「陶芸」を取り上げるとすれば、素焼きの器を用意し、絵付けに重点を置いて絵画もしくはデザインと位置づけます。自由に絵柄を考えさせるにしろ、染付などの伝統文様や模様を鑑賞として紹介し、また制作においては釉薬の性質や、筆づかいが紙の場合と違うことなどのある程度の専門技術は教えます。焼成は窯が無い学校では、業者に出します。

「染色」は、「型絵染」技法が美術の絵画と工芸の染色作業の両面が同等の割合になる課題です。作品はハンカチや手ぬぐいなど用途があり工芸ですが、型絵が絵画、デザイン分野にあたります。美術、工芸の両方で扱う課題として自然と考えます。

一見こじつけのようですが、指導の力点と評価の観点をどこにもっていくかで、美術と工芸の「住み分け」ははっきりし、生徒も納得するのではないのでしょうか。

さらに、日本の美術工芸の原型は、歴史的に中国、朝鮮半島にあり、さらにシルクロードを通ってきた西洋の文化も混在していることを知らせたいです。昨今「クールジャパン」をメディアは大いに取り上げていますが、日本の美術をつきつめることはナショナリズムではなく、むしろグローバルに広がっていくことを生徒に伝えたいです。